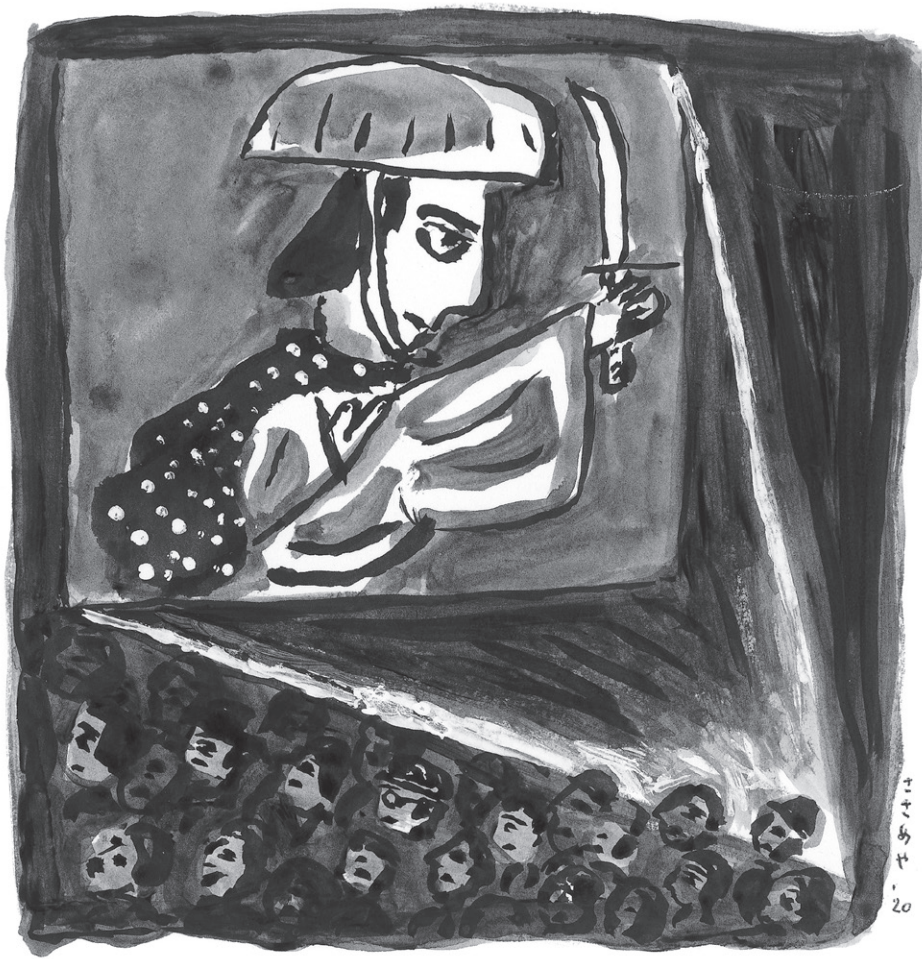


わたしの原風景

17

さなめやゆき

絵本作家



ボクと弟は石けんと手ぬぐいを持って、一日おきに銭湯へ行った。

その風呂屋の前が映画館。最終の上映が始まると、もぎりのお姉さんはいなくなってしまうので、無料で映画が見られた。その誘惑から逃れられない兄弟だ。適当に頭からお湯をかけて映画館へ走った。

すると、おとといと同じシーンだった。股旅姿の高田浩吉がススキの穂を持って、気持ちよさそうに歌を唄って峠をこえていくのだ。

小学四年生のボクはうっとりしてやまない。だが、ふと、いまごろ、かあさんは店を閉めているだろうかと、ちよっぴり、うしろめたい気持ちかわいてくるのだった。道路まではみ出した商品をしまい、日よけのテントをまきあげて、それから雨戸を店の横から持ってきて店を閉じるのだ。まだシャッターなんて気の利いたものはなかった。風の強い晩など大変だったろうな。

それでもボクと弟は銭湯の帰りに映画館をのぞくのが癖となり、トニー谷の『さいざんす二刀流』を見て「さいざんす」が口癖になり、金語楼の兵隊ものを見ては湯冷めしそうになり、家に戻るやいなや蒲団にもべり込むのであった。指折り数えてみれば、もう七十年近く昔のことである。

母の敷いておいてくれた蒲団はどこか湿った匂いがしていた。ボクは雨の日はその床の中に入って雨音を聞いた。そして「少年画報」を読んでいると、どこまでも自堕落になっていった。かあさんはボクたちが寝入ったあとに銭湯にゆく。いったい、いつ眠っているのか、翌朝早く「ごはんだよ」と起こしてくれる。かまどのお釜から白い湯気が溢れ、鍋にはじみ味の味噌汁、納豆には細かく刻まれたネギ。こうしたくり返しの中、ボクたちは少しずつ大きくなったのだ。

そのころかあさんはどんな気持ちでボクたちを見て、そしてさやかな自分の人生をどう思っていたのだろう。今日、ふとその頃の母が思いつかび、ボクの目は熱くなった。